



Title	17世紀デカンの驚異文学：ダカニー・ウルドゥー語の物語詩『愛の花園』
Author(s)	北田, 信
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2025, 2, p. 121-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100805
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

17 世紀デカンの驚異文学

——ダカニー・ウルドゥー語の物語詩『愛の花園』——

北 田 信

キーワード アジャーイブ ビージャープル ヌスラティー 百科全書 マスナヴィー
略語 A.=Arabic P.=Persian NIA=New Indo-Aryan

17 世紀デカンに栄えたムスリム王国ビージャープルの宮廷詩人ヌスラティー Nuṣṛatī が西暦 1658 年¹⁾にダカニー語（あるいはダカニー・ウルドゥー語²⁾）で著した物語詩（マスナヴィー）『愛の花園』（Gulšan-e-ʿIṣq 略語 GI）は、思春期にある少年が夢の中で見た異国の少女に恋い焦がれ、長く困難な冒険をしてたどり着き結ばれる、という、少年の成長を描く一種の Bildungsroman である。ヌスラティーが『愛の花園』を著した時、ヌスラティーはまだ若く 20 代であり、さらにこの物語詩を献上した相手アリー・アーディル・シャー 2 世 ʿAlī ʿĀdil Šāh II は少年であった。この作品が想定する読者は、第一に、少年王であったろう。またこの当時、アリー・アーディル・シャー 2 世はまだ少年であったため、継母ハディージャ・スルターンを後見人としていた。ハディージャ・スルターンはダカニー語文学の振興に努めていた [Mathews 1976: 100] から、彼女と、彼女を取り巻く後宮の女官たちもまた、ヌスラティーが読者として具体的に想定した人々に含まれていたと思われる。ただ、ビージャープルでは、アリー 2 世の祖父にあたるイブラーヒム・アーディル・シャー 2 世の時代からダカニー語文芸は既に盛んであり、その読者層は宮廷に暮らす人々だけでなく、広く多様だったと考えられる。しかしいずれにせよ、この作品が直接語りかける相手として、少年王と彼を取り巻く女性たちを想定していたことは、この作品の節々から感じ取られる。

ヌスラティーには「博覧強記」という形容が相応しく、至るところで百科全書的な、学術的な記述を繰り返す。しかしそこに思想性の深みが感じられるかというと、そうとも言え

1) [Mathews 1976: 103]

2) この言語を「ウルドゥー語」の先駆形と見なすのは、近現代の研究者の評価である。この時代には「ウルドゥー」という言語名称はまだ生まれていなかったから、今日一般的に使われる「ダカニー・ウルドゥー語」という名称は厳密に言うとは時代錯誤である。そこで本論文ではデカンのこの言語を「ダカニー語」と呼ぶことにする。

ない。むしろムスラティーの叙述の魅力は、こまごまとした事物の具体的で詳細な描写にあり、事物が耽美的に、色彩豊かに躍り出てきて、読者はそれらを、五官を用いて実際に味わっているかのような錯覚をおぼえる。「百科全書的」という性格は、この作品が単なる娯楽でなく、教養文学として読まれ得たことを示唆する。

実は、アリー・アーディル・シャー 2 世の曾祖父にあたるアリー・アーディル・シャー 1 世 ‘Ali ‘Ādil Shāh I (治世 1557-1579) の宮廷では、『諸学問の星々』Nujūm al-‘Ulūm という百科全書的な書物が作られていた。この書は占星術とそれに基づく魔術を扱ったもので、イスラームとヒンドゥーの占星術・錬金術 (rasāin) が混淆した魔術的で極彩色の天界図を多く含む豪華写本が現存している³⁾。後半は残念ながら欠損しているが、目次によると、一見、占術や魔術に関わりがなさそうな雑多な学問分野 (戦術、医術、獣医学、音楽、造園術、レスリング、宝石鑑定、算術、菓子製法など) が扱われていた。一冊の書物の中に全世界を内包するようなこの傑作を、おそらくムスラティーも目にしたはずである。架空の御伽話でありながら同様に百科全書的な『愛の花園』執筆にあたって、何かしらの影響をこうむった、と考えられる。

また、『愛の花園』は、イスラーム文化圏に広く人気のあった「驚異文学 ‘Aja’ib literature」の流れを汲むものであると思われる。「驚異文学」とは、世界の摩訶不思議を、地理書・博物誌・旅行記などのかたちで集めたもので、12・13 世紀を中心に盛んに編纂されたジャンルである⁴⁾。たとえば 10 世紀ペルシアの旅行者ブズルグ・イブン・シャフリヤール Buzurg Ibn Šahriyār 作『インド驚異譚』‘Aja’ib Hind はインドとインド洋の驚異譚を扱い、人気があった。

さて、現段階では『愛の花園』と、イスラーム世界の「驚異文学」との繋がりを明確な形で示すことは筆者の能力を超えるが、以下にそれを示唆するような箇所を幾つか抜き出し、見ていくことにする。

以下、原文テキストからの引用箇所を Abdulhaq 校訂本により [GI 頁数, 行数] というふうに示す。必要に応じて、フィラデルフィア美術館所蔵写本の読みを参照し、これを [Ms. fol.] と示す。

『愛の花園』において、主人公マンハル王子が病に罹り、それが恋煩いであること、さらにその対象は夢の中で見た異国マハーラス・ナガルの王女マドマーラティーであることが判明すると、父王は、隠密達を諸国に派遣し、その王女を探索させることにする。[GI p. 86, l. 18 — p. 87, l. 13]

3) Nujūm al ‘Ulūm については Flatt [2011] を参照せよ。

4) イスラーム世界の「驚異文学」については山中 [2015] を参照せよ。

隠密達 (šāṭirān) は、少しも怖れることなく、七つの気候帯 (haft iqlīm) じゅうを
探し始めた。[GI p. 87, l. 13]

GI p. 89, l. 15ff では、隠密達が捜し歩いた土地として、「七つの大地」(sāt zamīn) つまり世界
中の地名が羅列される。

マデイーナ、マッカ、ナジャフ⁵⁾、そしてアラブ、モカ (muxā)⁶⁾、エジプト、カナーン、
ゴウル⁷⁾、アレppo (ḥalab)、イラク、ホラーサーン、カーシャーン、シリア⁸⁾、清らか
なるスィースターン、ヤズド、タブリーズ、ジャーム⁹⁾、なんとトルコ、タジク¹⁰⁾とイ
スファハーンまで、全ての荒野 (sād)、灼熱のマーザンダラーン、マラバル、ローマ
(rūm)、アビシニア (ḥabš)、ザンジバル、スィジスターン (ペルシア東部)、イラン、トゥー
ラーン、ラール (lār)、プハラとバルフの町、カシュミール、トランス・オクサニア (mā
warā'u-l-nahr)、中国と大中国 (čīn o mā-čīn)、人跡未踏 (P. paigūr) の漢 (xang)¹¹⁾、
異教徒 (P. gaur)¹²⁾ [の国々]、ポルトガル、フランク (farang) までも、カーブルやザー
ブル (P. zābul)¹³⁾、契丹と韃靼 (xiṭā o xutan)¹⁴⁾、ニーシャープール、ホルムズ
(hurmuz)、カーイル・パタン¹⁵⁾、〈p. 90〉イエメン、バダフシャーン、シーラーズ、トゥー
ス、サミスターン¹⁶⁾、ケルマーン、アルマーン (armān)¹⁷⁾、ロシア、サマルカンド、カ
ンダハール、スィンド国、ラーホール、ムルターン、デリー、インド (hind)、タッター
(Ms1. ṭhattā)¹⁸⁾、グジャラート、ハーンデース (xāndēs)¹⁹⁾、バンギシュ²⁰⁾、ゴウル

5) A. najaf. イマーム・アリー墓がある場所。アーディル・シャー王家はシーア派であった。

6) A. muxā 'The town of Mocha (on the west coast of Arabia)' [Platts]

7) A. gaur 'a low-lying district betwixt Jerusalem and Haurān' [Steingass]. アフガニスタンのゴール
を指す可能性もあるが、この詩節ではアラビアの地名が列挙されている。

8) A. šām 'Syria and Damascus' [Steingass]

9) P. jām ホラーサーンの一地名。詩人ジャーミーの生誕地。[Steingass]

10) Ms. fol. 96b: tājik

11) P. xang 'depravity' は文脈上そぐわない。むしろ、中国の異名「漢 Han」を指すのではないかと思う。

12) Skt. gaur- / NIA gor- は「肌の白い、白人」を意味する。

13) Cf. zābulistān 'Kābul, Ghaznīn etc., the native country of Rustam' [Steingass]

14) A. Xiṭā' pl. of xatwat 'steps' [Steingass] とあるが、ここでは中国北部を漠然と指している。P.
xutan 'Tartary' も同様。

15) KAYL PTṬN 不明。

16) SMSTAN 不明。Ms. fol. 96b: SMJAN.

17) アルメニア (armanistān) を指すか？

18) 不明。

19) 不明。「ハーン (可汗) の国」という意味か？

20) Bangiš 'Name of a country in Turkistān' [Steingass]

(gaur)、ベンガル、コータール (kōṭāl)、ベース (bhēs)²¹⁾、SWMA、BGLANA²²⁾、TLの山を掘り (kōh-kan)²³⁾、ベラール (Msl. birār)、NWL、テランガーナ、デカン (dakhan)、カルナータカ、マルナール国 (MLNAR)、ランカー、PR LNKA ARWH、ṬALNAR²⁴⁾、これら全ての国々を、目に熱意というアイシャドウ (anjan) を塗って (= 目を皿のようにして) 探したのだが、どの宝物庫 (のような土地) にも、女を見つけられなかった。

ここに羅列されているのは、「七つの気候帯」(haft iqlīm) とか「七つの陸地」(sāt zamīn) と呼ばれる様々な場所、つまり当時知られていた全世界の代表的な地名である。

隠密達は結局、王女の住む国も、王女も見つけることができなかった。王女の住む国の名マハーラス (Skt. mahā-rasa)・ナガルが、錬金術的な含意を持っているのは興味深い。「マハーラス」とは水銀を意味するサンスクリット語である。

ついに王子は自ら探索の旅に出ることを決意する。王子は船に乗り、海を渡ろうとする。ところが航海中、巨大な海蛇に襲われ、王子の艦隊は破壊されてしまう。王子は独り、未知の陸地にたどり着き、孤独で過酷な旅を続行する。

未知の大地では、王子はまず、冬の寒さに遭遇する。そのことについて、次のように述べられる。

(GI p. 101, ll. 9–13) 世界の帝王たる太陽は、慈愛の光 (meherbānī) により四元素 (cārō ‘anāšir) に等しく恵みを与える。しかし、今、太陽 (sūr) は、女への恋煩いに苦しむ勇者 (sūr) のように、女に対して心も身体も虜となり合わさっていた (hil mil)。それゆえ、冷の特性 (thaṇḍ kī xāšiyat) が優勢になり、火 [の要素] に委縮 (afsurdagī) が巢食った。火の働きが少なくなったのを見て、冷性 (thaṇḍ) は世界に自分の軍旗を高く揚げ、自分の戦術である寒さ (bard) をつかみ、寒さ (sard) の風を剣として抜き、駆けた。

ここでは、ヘレニズムの四元素理論を前提として、寒冷気候帯の発生のプロセスが説明されている。そしてそれは、恋煩いに苦しむ王子の心身の状態に並行している。これに続くくだ

21) 不明。kōṭāl-bhēs は「守衛 (kōṭwāl) の恰好をして」という意味にもなる。地名ではなく、「密偵達は守衛に変装して [忍び込んだ]」という意味か？ Cf. Ms fol. 96b: KWNTĀL (i.e. Dakani 語彙 kōṇṭāl ‘makkār, farēbi’ [Ja’far 2008: 386].

22) Ms fol. 96b: SWMA haur WBGLANH.

23) 地名が羅列されているが、具体的に何処を指すか不明。P. kōh-kan 「山を掘る者」は通常、ペルシア古典文学の恋物語「ホスロウとシーリーン」の登場人物ファルハードの仇名である。ここでは、地名であるか、あるいは、密偵達が山をも掘削して隈なく探索した、ということであろうか。

24) 南インドおよびセイロン島の地名が列挙されているらしいが、不明。写本の読みに依った。

りでは、寒冷帯で見られる様々な現象が述べられる。

（Page 102, ll. 8-11）厳寒（zamharīr）は、興奮のあまり、冷たい炎の水を流れさせた。そこから燃え盛る委縮（*afsurdagī*）が生じ、水も土も一様に凍ってゼリー状（*pālūdah*）になった。サワーミルク（*dūg*）のような雪（*barf*）が降り、水という乳は凍ってヨーグルト状になった。しかし、このヨーグルトに陽光が差すと、ギー（*ghī* 精製バター）のように溶けるのが珍しい見物である。雪が空中から地面に降るのではなく、むしろ天空の冷氣〔そのもの〕があふれて溶けて落ちてくるかのようだ。はたまた、天空の美しく清らかな祝宴（*lagan*）に灯るローソクがロウをぼたぼたと滴らすよう。風は地面に雪を堆積させ、水晶とモルタルの床のようにした。〔雪により〕山々の頂は分厚く覆われ、白髪の老人のようになった。山々はもはや硝石の堆積には見えず、水晶の塊に見えた。枝に貼りついた氷で、樹々は飴細工（*miṣrī nabāt*）のように見えた。たくさんの小石は雪にまみれて、甘納豆（砂糖でコーティングした豆菓子）のよう。細かな砂は、仁丹（*sōnf dānē*）²⁵⁾のよう。

このように、熱気に包まれるデカンの地に暮らす人々がめったに目にすることがなかったであろう寒冷帯の雪や氷という驚異的現象が描写される。それは、寒気によって地上のあらゆるものが凝固し委縮（*afsurdagī*）する世界である。そしてこの光景は同時に、王子の心の消沈（*afsurdagī*）を映しだしてもいる。

しかし、王子は神を想起し、神の加護を祈る。すると王子は「心の中の苦悩は、外界で我が身に降りかかっている苦痛を凌駕する」ということに気づく。すると、彼の中に恋の別離（*birahā*）の炎、つまり内的な熱気が再び燃え上がり、勇ましく路を前進する。〔GI p. 103, ll. 16-19〕王子の内的な変化は、外界の変化に対応している。太陽の熱が勢いを取り戻し、雪が溶け始め、川が流れ始めるのだ。〔GI p. 103, l. 20〕

以上、『愛の花園』に述べられるマンハル王子の冒険のうち、寒冷気候帯を描いた箇所を検討した。この後も王子の旅の描写は続く。王子は草原を横切り〔GI p. 104, l. 2ff〕、さらに森林に足を踏み入れる²⁶⁾〔GI p. 104, l. 5ff〕。森林のはずれで強い光が見え、灼熱の砂漠が始

25) フェネルの種子を砂糖でコーティングしたもの。清涼感と消化促進効果があり、食後の口直しとして食べる。

26) このくだりは明らかに地誌を意識した描写となっている。「この森はアイシャドウのように漆黒の森（*kajali ban*）と呼ばれ〔GI p. 104, l. 3〕、土星（*zuḥal*）が支配し不吉である〔GI p. 104, l. 9〕。そこはアビシニア人（*ḥabaš*）の住む土地であり、ザンジバルあるいは“黒いインク”（*zangbār*）と呼ばれている〔GI p. 104, l. 10〕。」（抄訳）

まる [GI p. 109]。熱風の吹き渡る人気のない、あらゆる者が暑さで瀕死になる無慈悲なる砂漠を通過したとき、王子は清らかな庭園にたどり着く [GI p. 113, l. 1ff]。

地上の様々な気候帯を象徴的に描写しているこれらの箇所も、イスラーム世界で盛んに作成された驚異譚・驚異文学を模したものと思われるが、その検討はまたの機会としたい。

『愛の花園』において頻繁にみられる修辞法として、「詩節前半部でペルシア語彙を用い、後半部でほぼそれと同じことを今度はダカニー語彙で言い直す」というものがある。これらが全て詩的効果を狙ったものとは必ずしも言い難く、ただ単に前半句を後半句で翻訳しただけ、という場合も見られ、そういった類のものは、読者に語彙力を付けさせるための教育的効果を期していたのではないか、と思われる。本稿で考察した、世界じゅうの様々な地域名・国名の羅列や気候帯の描写も、この物語詩が、単に娯楽性を持つだけでなく、一種の教材として読まれ得たことを示唆する。

文献表

『愛の花園』(GI=Gulshan-e-'Išq) 原文テキスト校訂版

Abdulhaq (=‘Abd al-Haqq) (ed.) 1902: *Maṣnavī Gulshan-e-'Išq. Mullā Nuṣratī Malik al-Šu‘arā-e-‘Ādil Šāhiyah Bijāpūr, taṣnīf-e-sanah 1068 Hijrī*. Murattabah-e-‘Abdulhaqq. Anjuman-e-Taraqī-e-Urdū, Karācī, 1902 ‘Išvī.

『愛の花園』 フィラデルフィア美術館所蔵写本

Philadelphia Museum of Art, Accession No. 1945-65-22 (1a—255b) AD 1743

二次文献

Flatt, Emma 2011: “The Authorship and Significance of the Nujūm al-‘ulūm: A Sixteenth-Century Astrological Encyclopedia from Bijapur.” JAOS Vol. 131, No. 2: 223-244.

Ja‘far, Sayyidah 2008: *Dakanī Luḡat*. Qaumī Kaunsil barāe Farōḡ-e-Urdū Zubān, Nāi Dehlī.

Matthews, David John 1976: *Dakanī Language and Literature 1500 – 1700 A.D.* Thesis submitted for the degree of Ph. D., School of Oriental and African Studies, University of London.

山中由里子 (編) 2015: 『〈驚異〉の文化史—中東とヨーロッパを中心に—』 名古屋大学出版会

Wonder Literature from the 17th Century Deccan

Makoto KITADA

The Garden of Love (Gulšan-e-ʿIšq) is a Romance (Maṣnavī) written in Dakani Urdu by Nuṣratī, a court poet of the Bijapur Kingdom in the 17th century Deccan, India. This romance deals with young Prince Manhar's quest for Princess Madmālātī, whom he saw in his dream. Manhar's adventure contains a lengthy list of regions and countries of the world, as well as descriptions of climatic zones (iqlīm) and wondrous phenomena experienced in them. Presumably, these descriptions of wonders in the world are inspired by the so-called 'Wonder Literature' (ʿAjāʾib Literature), the genre of natural histories, which were widely produced in the Islamicate world from the 12th to the 13th century.